
琵琶湖周航の詩

由一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

琵琶湖周航の詩

【Nコード】

N1957Y

【作者名】

由一

【あらすじ】

滋賀県での様々な記憶。
忘れられない悲しい出来事。

ブローグ

僕は大学生だった頃、滋賀に住んでいた。

西大津と言うところにあるアパート「ハイツ小尾呉」の423号室。鉄道の駅は近く、学校へも京都までも20分くらいで行ける。デパートも近くにあり、色々な店が立ち並んでいて住みやすい場所だった。

夏は暑く冬は比叡山おろしで寒かったが、それを差し引いても良いところだったと思う。

大学に入ってからずっと、卒業するまでこの場所に住んだ。
今思えば、充実した毎日だった。

芸術系大学だったので制作に汗を流した。
友達とも、いろいろな交流をした。

色々なものを見て、色々な経験をした。

楽しい事もあった。

嬉しい事もあった。

辛い事もあった。

腹の立つ事もあった。

そして、とても悲しいことがあった。

けれど、その全てが今、僕の人生の宝物になった。

滋賀の春（前書き）

4月、僕は大学に入学した。

滋賀の春

滋賀の春は、少し寒かった。

故郷と比べても、この4月の風は体に染みわたるようにひんやりとしている。

「雄琴」と言う駅で、僕は電車を降りた。

コンクリートの階段を下りて改札口を出ると左右に道が広がる。

バス停は湖側にあつた。学校行きの無料バスは既に着いていたが、随分と早く辿り着いたので僕は歩いて学校に行くことにした。それくらいに良い天気だった。

徒歩で18分。

そう聞いてはいたが、歩き始めると長い坂が姿を現した。

水平線を通り越し空に向うような上り坂だ。

手持ちのカバンをゆらゆらと揺らしながら、僕はその坂を歩む。

空は透き通るように青い。

名も知らぬ鳥の声がする。

坂が、その頂を迎えた時、僕は風の方を向いた。
風が吹き付ける方向には、琵琶湖があつた。

きっと、毎日のようにこの大きな湖を見ることがなるのだろう。

歌声（前書き）

坂が下りに差し掛かった時……

歌声

ふと、前方を見ると、長い下り坂の中に人影があった。
僕以外にも既に学校に向っている人がいたのだ。

とても人見知りだった僕は、ある程度近づくが、それ以上は近づかず、一定の距離を保ちながら歩いた。人影は、女の子のようだった。

声で確信に至った。

彼女は、僕の耳でもよく聞こえるくらいの声で、歌を唄っていたのだ。

我は湖うみの子 流離さすらいいの

旅にしあれば しみじみと

昇る狭霧や さざ波の

滋賀の都よ いざさらば

それは、美しい声だった。

テレビなどで聞く、電子がかった流行曲にはない、爽やかで自然な歌声だった。それは春の風に伴うかのようで、僕はその声に心を奪われていた。いつまでも聞いていたいと思った。

さわさわと道路沿いの並木が揺れる。

一迅の強い風が僕に吹き付けた時、彼女は僕の方を振り向いた。

空を吸い込んだような青みがかった黒髪に、引けを取らない整った顔を併せ持った彼女は、優しげな表情を浮かべていた。

これが、僕と入瀬^{いりせ} 璃緒^{りおな}奈との初めての出会いだった。
この時はまだ、僕達はただの他人でしかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1957y/>

琵琶湖周航の詩

2011年11月11日02時51分発行